

# 幼稚園における食育活動

## —魚のつかみ取り体験からの展開—

廣 瀬 三枝子・小 藤 聖 佳・渡 辺 愛 華・福 家 明 美  
平 尾 美 香・林 美 代

### 1. 研究の所在と目的

現在、幼稚園においても食育の重要性が指摘されるようになった。食は我々の健康に直結した重要な問題であり、我々が健康を保ち生涯にわたって暮らすために不可欠である。その一方で、社会の変化に伴い我々を取り巻く食に関する環境は大きく変わっており、不規則な食事や栄養の偏り、生活習慣病の増加、食の安全性の問題や食の海外への依存の問題、さらには地域独自の食文化や伝統的な日本の文化としての食の喪失などが指摘されている<sup>1)</sup>。

このような食を取り巻く現状に危機感を覚える中、国民が生涯にわたって健全な心身を培い、豊かな人間性を育むことを目的として2005年に『食育基本法』が成立した。その前文では、「食育を、生きる上での基本であって、知育、徳育及び体育の基礎となるべきものと位置付けるとともに、様々な経験を通じて「食」に関する知識と「食」を選択する力を習得し、健全な食生活を実践することができる人間を育てる食育を推進することが求められている」<sup>2)</sup>とあり、「食育」が生きる上での基本であり、知育、徳育、体育の基礎となるべきものとして位置づけられている。その重要性を受け、2008年の『幼稚園教育要領』には食育に関する事項が追加された。その領域「健康」の内容の取扱いにおいて、「健康な心と体を育てるためには食育を通じた望ましい食習慣の形成が大切であることを踏まえ、幼児

の食生活の実情に配慮し、和やかな雰囲気の中で教師や他の幼児と食べる喜びや楽しさを味わったり、様々な食べ物への興味や関心をもったりするなどし、進んで食べようとする気持ちが育つようにすること」<sup>3)</sup>とされた。

また、「第三次食育推進計画」では、国民一人一人が食育活動を実践するとともに、関係者が多様に連携、協働し、食育を推進することを目指すとしてあり、重点課題として健康寿命の延伸につながる食育の推進、若い世代を中心とした食育の推進などの5つの項目が挙げられた<sup>4)</sup>。健全な食生活を日々実践し、おいしく楽しく食べることは、人に生きる喜びや楽しみを与え、健康で心豊かな暮らしの実現に寄与する<sup>5)</sup>ものであり、保育現場においても子どもが食に興味・関心が持てるような活動を進めていく必要がある。

子どもが「食」に興味・関心を抱き、命と向き合い食べ物の尊さを感じる食体験として栽培活動があり、植物を育てて食べるという観点からの研究は多く存在する。それらの研究から栽培活動は、種まきから収穫まで植物の成長の順序や様子を知ることができ、野菜のでき方、世話の必要性、労作の体験によって食べ物の尊さや生き物への愛護の心を育てることが出来るとされている<sup>6)</sup>。しかし、魚を食べる経験に関するものは少なく「食」と繋がる報告としては意味があると思われる。

そこで本研究では、本学附属幼稚園で実践された魚のつかみ取り体験からの食育活動とその後の園生活における子どもたちの活動の検討を行うことにした。食育活動の目標や子どもに対する食育の内容や方法、教職員や地域との連携などの検討を通して、幼稚園での食育の充実を図ることを目的とする。

令和2年1月6日受理

連絡先 〒769-0201 香川県綾歌郡宇多津町浜一番丁10番地

香川短期大学 子ども学科

TEL 0877(49)5500 FAX 0877(49)5252

Email fuzoku05@mail4.kbn.ne.jp

## 2. 研究の方法

### (1) 研究対象

香川短期大学附属幼稚園 5 歳児、担任教師及び活動に関わる園の教職員

### (2) 研究方法

- ①魚のつかみ取り体験及びそれを起点にした活動における子どもの様子を観察・記録する。
- ②子どもの様子や教師の支援を分析する。
- ③活動の影響（効果や問題点など）を考察する。

### (3) 活動期間と内容

活動期間は、2019年9月～10月頃まで

活動内容は、魚のつかみ取り体験及びそれを起点とした一連の活動

## 3. 魚のつかみ取り体験と食育活動

### 【事例①：アジ・タコのつかみ取り体験】

9月3日、年長2クラスを対象にアジ・タコのつかみ取り体験を行う。前日には、スクリーンでつかみ取りの動画、水族館やイルカショーの様子を見て「つかみ取り」というイメージを膨らませ、当日を楽しみにしていた。

園庭に用意された水槽で、間近でアジやタコが泳ぐ様子を見た子どもたちは「こうやって泳ぐんだ」と新しい発見をしているようであった。しかし、実際に水槽に入ってつかみ取りをすると緊張からか戸惑っていたようなので、まずは教師が水槽に入ってタコを触って見せた。すると、安心できたのかA男がアジをつかむことに挑戦する。クラスの子どもたちは「頑張れ!」と応援しながら見守り、上手くつかめた時には大歓声を上げる。友達が触れている姿を見て刺激を受け、チャレンジする子どもが出る。その後は「私も僕もやってみたい」という気持ちになり、最初は「怖い」「嫌だ」と言っていた子どもたちも次々に挑戦していく。また、触れることが出来た喜びから何度も触れようとする子どもいる。

今回、瀬戸内の水産業者と知り合えたことから魚

のつかみ取り体験が行えることになった。活動の動機づけとしては、これまでの子どもたちの経験からのつながりが重要である。そのため、夏休み前後に行った活動との連続性を意識して活動を行った。子どもたちは夏休み前に釣りをしたり、夏休みに水族館に行ってスケッチしたりしており、魚と繋がることは経験しているので、それらを動機づけとした。子どもたちは魚について調べたり描いたりして友達同士で話し合う場面もあり、翌日への期待をもった中での当日であった。このことから、子どもたちの意識は繋がっており、子どもの姿を捉えながら活動を組み立てることの重要性が分かる。

魚のつかみ取り体験（図1、図2）を楽しみにしていた子どもたちであるが、アジやタコが間近で泳ぐ姿を見て、実際に水槽に入ることには戸惑いが見られた。そのため、教師が見本を見せることにする（図3）。戸惑っていた子どもたち、魚が泳ぐ姿が怖いと感じていた子どもたちのために、教師がやって見せることで子どもたちの中に安心感が生まれ、A男のように自分もやってみようという子どもも出てきた。A男がチャレンジし、それをクラス皆で応援し成功した時には皆で喜び合った（図4）。そのような友達の姿を見ることで、やってみたいという思いが次々に広がっていく形となった（図5、図6）。ここでは、子どもたちの活動への動機づけとして、教師がモデルを示したことが大きい。『幼稚園教育要領』において、「幼児の主体的な活動を促すためには、教師が多様な関わりをもつことが重要であることを踏まえ、教師は、理解者、共同作業者など様々な役割を果たし、幼児の発達に必要な豊かな体験が得られるよう、活動の場面に応じて、適切な指導を行うようにすること」<sup>7)</sup>とあるように、教師が活動を楽しみ集中して取り組む姿は、子どもを引き付ける。子どもは、日々の教師の言動をモデルとして学ぶことも多いので、教師が水槽に入って見本を見せるということは「先生のようにやってみたい」「先生のようにやればいいのか」という思いが生まれるような援助であったと思われる。

しかし、それでも生きた魚が怖い子どもやなかなか水槽に近づけない子どももいた。その時は教師が魚を手にとった魚を指で触るところから始めた。子どもたちが次々につかんでいったことで魚が疲れて



図1 つかみ取り体験



図4 アジをつかむA男



図2 水槽で泳ぐアジ



図5 他の子どもたちもアジに挑戦



図3 タコを触って見せる教師



図6 タコにも挑戦



いき、B子は魚が疲れた頃にやっと水槽に入れるようになった。そしてつかみ取りを体験し、水槽の中でアジを捕まえられた時の顔が自信にあふれていた。B子にとって動き回る魚をつかむことには怖さがあったと思うが、教師が手に取った魚を指で触ることから段階を踏んで挑戦していくことで、「出来た」という喜びを感じられるまでに至ったと思われる。子どもの発達や思いに応じた援助のタイミングや援助の仕方を考えることが重要であり、それによって子どもの達成感が得られる結果となった。

さらに、この体験は実際に触れ合うことで命を感じることもなった。アジやタコの泳ぎ方を観察することで、「こうやって泳ぐんだ」と泳ぎ方を知るだけでなく、動いている、生きているということへの理解もできたと思われる。また、触るとツルツルしていたという感触や、タコの吸盤の力が思った以上に強かったという発見もあり、海の生き物への興味・関心も広がっていった。そして、タコが墨を吐くところも見ることができ、子どもたちには驚きと同時にめったに見られないものが見られた喜びもあった。これらは命の営みであり、また生き物の不思議さでもあるので、子どもたちには貴重な体験となったであろう。

#### 【事例②：アジをいただく】

つかみ取りの後、小グループに分かれてアジをさばくところを見学する。さばく時に血が出たり魚の心臓を見たりする経験の中で、我々は別の命をもらって生きていることを教えてもらう。「アジが可哀そう」と、魚の気持ちになっている子ども、真剣な表情で様子を見ている子どもなどおり、子どもの中に様々な思いがあったことが感じられた。

取れたてのアジはとても美味しく、「おかわり」という子どもがたくさんいた。魚が苦手だった子どもたちも、取れたてのアジを味わうことで好きになることもできた。

これは、つかみ取りの後で行われた活動である。小グループで「今から魚の命をいただくね」と丁寧に説明を受けながらさばくところを見学した（図7、図8、図9）。先ほどまで触れ合ったアジで



図7 アジをさばく様子①



図8 アジをさばく様子②



図9 アジをさばく様子③



図10 アジをいただく様子

あったため、子どもの中ではいろいろな思いがあったのではないかと推測できる。「アジが可哀そう」という子どもも出ることは容易に想像できたが、年長児での体験であり大人たちの丁寧な説明と個別の対応もあったからこそ、真剣な気持ちで生き物の命をいただくという体験ができたのではないかと思われる。このような命に触れる体験は、生きているということの実感であり、命の大切さに触れる大きなものとなった。

この体験は、「食」と繋がるものである。生きている魚の命をいただき、我々は生きているということを感じた体験であったと思われる。さばく時に血が出たり魚の心臓を見たりする経験を通して、命の巡りや食べたり食べられたりといった食物連鎖などの自然の摂理や仕組みも子どもなりに感じたのではないだろうか。命に関することは、命に向き合うことでしか学べないと言われることもある。それは、生きている姿そのものを知り、それが食品として口に入るまでの過程を知ることで、尊い命を食べていることが理解でき、手を合わせて「いただきます」と言えるようになる<sup>8)</sup>と考えられるからである。まさにこれはそのような体験であった。その体験の中で様々な思いも経験したが、子どもたちは魚への興味・関心と、食材として食べてみたいという気持ちが育っていった。魚が苦手であった子どもも、食べてみたいと思えるようになり、進んで食べてみようとする気持ちも生まれていったのである(図10)。

また、取れたてのアジを味わった経験を伝えたことで、家では魚を初めて幼稚園で食べられたので、「是非家でも食べたい」と子どもが言っていたという声が保護者から伝えられた。幼稚園と家庭との関係は、「幼児の家庭や地域社会での生活経験が幼稚園において教師や他の幼児と生活する中で、更に豊かなものとなり、幼稚園生活で培われたものが、家庭や地域社会での生活に生かされているという循環の中で幼児の望ましい発達が図られていく」<sup>9)</sup>とされるように、子どもの生活は家庭や地域、幼稚園と連続しており、そこでの循環が重要である。幼稚園の出来事が家庭での「食」の意識の変化につながったというこの活動は、幼稚園に留まらず家庭も巻き込んだ体験となっていったといえよう。本物の体験だからこそできたことでもあったと考えられる。

さらに、この活動は瀬戸内の水産業者と知り合えたことから始まっている。これは地域資源を活用した体験でもある。地域と繋がるのが子どもたちの体験の幅を広げていくこと、また、地域の文化や産物、行事を通して経験を豊かに重ねていくことが、子どもたち自身にとって地域への深い愛をもつことに繋がっていくと思われる。私立幼稚園では、地域と繋がるということはなかなか難しいところもあるが、チャンスを上手に活用して地域の中に入っていくことに努めたいと思えるような体験でもあった。「食」に関することなどの活動では、地域資源の活用的重要性も必要である。

#### 4. 食育活動後の展開

##### (1) 魚を描く

魚のつかみ取りと魚をいただく体験の後、10月の作品展に向けて魚を描く活動へと動き出した。海の中をプロジェクターで大きく投影し、生き物の生態を見て表現のイメージを広げられるように工夫をした。その中で先日のつかみ取り体験を思い出し、「アジやタコもいた!」と魚だけでなくタコも描く子どもが現れ、さらに海の中の生き物を描くという活動へと発展していった。海の中の生き物を子どもたちが考える中で、今どきではあるが「すみっこぐらしも海の中の生き物」という子どもも出る。子どもの中では、現実にもメルヘンがたくさん混在して

いることを感じさせられた。

絵を描くにあたっては、つかみ取りの体験から本物に近づけるように何度もタブレットの映像を見に行き、動きを確かめながら描く子どもも多く見られた。本物の大きさや形、ひれや鱗、手足の動きについて知り、詳しく描こうとする姿が合った(図11, 図12)。クレヨンで色を塗る際には、タコの足の色の違いに気づき、指にクレヨンをつけてなじませながら塗る(図13)など、子どもたちはそれぞれの思いを大切にしながら絵を描いていった。また、友達同士でどこに何を描くか相談し合って場所を考え、水族館や大きな海の中など、どんどんイメージを膨



図11 墨を使って(魚を描く)



図12 墨を使って(タコを描く)

らませていく姿も見られ、1匹だけではなく何匹も描きたくなる子どももたくさんいた。

折り紙表を見ながらクジラや魚、タコやサメなどを作ることにチャレンジする子どもも出る(図14)。ジャンボ折り紙やキラキラ折り紙など、いつもの折り紙とは違う素材を使ったことで嬉しそうに折っていた。

## (2) 大きな段ボールに描く

絵を描いたり折り紙を折ったりする中で、ダイナミックに段ボールに魚を描いていくようになる。横になってのびのびと様々な素材を使いながらクラス作品を作っていくことを楽しむ(図15, 図16)。初めは手で塗っていたが、「早く青い絵の具が塗りたい」と言って裸足になって塗ることも楽しみだす



図13 タコの色塗り



図14 折り紙で表現



ようになる。片手が両手になり、足にも絵の具を付けて、とどンドン活動がダイナミックに展開されるようになる。

手足を使って楽しんでいるので、ボディペインティングの絵の具も用意する。すると、それを使って宝島を描き、手が緑色になったことを喜ぶ（図17、図18）。

さらに、ボディペインティングの絵の具を全色用意すると、『にじうおのさかな』の絵本を見ながら大きな魚を作る（図19）。子どもたちは手や足に自分で好きな色を付けて遊びながら描くことを楽しんだ。「気持ちいい」「うろこがいっぱい」という言葉が出たり、筆で描くよりも手足を使って描いた方が楽しかったという表情の子どもがたくさんいたりし



図17 宝島を描く様子



図15 段ボールに絵を描く様子



図18 ボディペインティングの絵の具を使って



図16 段ボールに描いた海



図19 魚作り

た。子どもたちにとって大きなキャンパスに自由に描くことが楽しかったように感じた。

## 5. まとめ

以上のように、今回は魚とのふれあいから始まる食育と、その後の遊びへの展開について実践をまとめた。生き物の命をいただくという活動であったため、子どもたちの中には様々な思いが生まれたのは間違いないが、我々が生きるということ、食べるということの意味はよく理解できたのではないか。子どもたちの中に「苦手だった魚もおいしく食べられた」という思いが広がっていきっており、魚という生き物への興味・関心にもつながったと思う。

今日、「食べ物への興味や関心を育てる」という「食育」が現代的な課題として『幼稚園教育要領』の中でも見直され、望ましい生活習慣を育てたり食への興味・関心を高めたりすることが求められるようになった。「食育」は主に「健康」の領域で扱われるが、幼児の活動は様々な領域と繋がっており、総合的に展開される。今回の活動は、食べ物への興味・関心を高め、食べる喜びや楽しさを感じるという点では「健康」の領域、友達とともに活動するという点では「人間関係」の領域、瀬戸内の魚を使った料理であるので地域社会における文化や伝統に気づくという点では「環境」の領域、命あるものへの関わり、生命尊重という点でも「環境」の領域、振り返りの中で見たり聞いたり感じたり考えたりしたことを言葉によって表現するという点では「言葉」の領域、手触り、動きなどに気づく、感じるという点では「表現」の領域と関わっていた。そして、この活動により子どもの表現活動は豊かなものとなっていった。

今回、水産業者と知り合えたことから活動が始まった。幼稚園の子どもたちの豊かな体験のためには、地域との関わりも重要である。「地域の自然、高齢者や異年齢の子供などを含む人材、行事や公共施設などの地域の資源を積極的に活用し、幼児が豊かな生活体験を得られるようにくふうするものとする」<sup>10)</sup>とあるように、地域の人材とどのようにつながるかを考えていく必要がある。また、幼稚園の果たす役割の変化もしてきており、子育て支援の機能

や幼児期の教育のセンターとしての役割も求められており、ますます「地域に開かれた幼稚園」という視点が課題となってきた。今後は、地域の人材活用についても考えていく必要がある。

## 註

- 1) 森美佐紀・平工志穂 (2016)「幼児期における食育の現状と課題」『東京女子大学紀要論集』67 (1), pp.243-254
- 2) 『食育基本法』  
file:///C:/Users/staff/AppData/Local/Microsoft/Windows/INetCache/IE/GA4PDRI9/kihonho\_28.pdf (2020/01/02)
- 3) 文部科学省 (2008)『幼稚園教育要領』
- 4) 「第3次食育推進基本計画」  
file:///C:/Users/staff/AppData/Local/Microsoft/Windows/INetCache/IE/WKZ0U7DZ/3kihonkeikaku.pdf (2020/01/02)
- 5) 新宅賀洋・佐伯孝子・塚本真紀 (2018)「帝塚山幼稚園と連携した食育活動 (2) —給食に関する取り組み—」『帝塚山大学現代生活学部子育て支援センター紀要』3, pp.69-76
- 6) 高内正子監修 (2018)『保育実践に生かす保育内容「環境」(第2版)』保育出版社, p.122
- 7) 文部科学省 (2017)『幼稚園教育要領』フレーベル館, p.11
- 8) 前掲6)
- 9) 文部科学省 (2018)『幼稚園教育要領解説』フレーベル館, p.133
- 10) 前掲7), p.12